

profile

1965年、京都市立洛北高校から第1期生として京都産業大学経済学部へ入学。69年、設置された京都産業大学大学院経済学研究科修士課程へ卒業と同時に進学。71年には同研究科博士課程に進学(1977年に単位取得満期退学)。76年から77年にかけて約1年間、米国ジョージ・ワシントン大学に交換研究員として赴任。79年に鳥取女子短期大学(当時名称)講師。81年に助教、86年に教授、2001年に学長となり現在。



- 第1期生として入学された経緯は?
現役の時、受験に失敗。それで浪人していたある日、父親が「京都産業大学が来春開学」という情報を得て、私に勧めてくれたのです。
- 新設大学のどこに魅かれたのですか?
当時は学生運動の風が各大学を席巻しつつあった頃。その中で京都産大は「国際的視野を持った次代の日本を担う人材育成を掲げた建学の精神を、勇気をもって宣言していた。父や私はこれに感銘を受けて志望を京都産大に。第1期生として入学しました。
- 創立時の本学はどのような大学でしたか?
本館しかない……要するに「なんにもない」大学でした(笑)。しかし教員の陣容は素晴らしく、著名な教授や情熱にあふれた若き講師が多数おられた。施設的にはなんにもなくても、夢や希望がいっぱいある大学でした。そして、それら先生方との濃密な関係から、学ぶことの楽しさや面白さを知りました。
- 学生としての山田学長は?
すべてに対して意欲的だったと思います。何人かで柔道部を設立したのですが、その時「絶対に勉学をおろそかにしない」とことを自分に課しました。「文武両道」という言葉があります。私にとっては「文武一途」。勉学もスポーツも、ふたつあって一人前なのです。

鳥取短期大学 学長
山田 修平さん
やまだ しゅうへい
1969年 経済学部卒業
第1期生

「学生にとって大切なのは教員との親密な交流」。
自身の学生時代の成長を通して語る鳥取短大の学長は、
創成期の京都産大に学んだ第一期生。

●山田修平さん ●インタビューア

- なにか逸話がありますか?
3年時に柔道部寮を作ったのですが、寮生となった部員に「勉強しない者」がちらほら。定期的な勉強会を企画し、寮で行い続けました。フランス語が堪能な女性と知りあったのもその頃。それで寮に引き、フランス語学習会を開催しました。すると予想以上の大盛況。ところが顔ぶれを見てみると、フランス語を履修していない学生もいっぱい。そう、当時の京都産大では、女性を前にすることが、めったにない機会だったので(笑)。
- 鳥取短大の学長といふ今
京都産大からなにごつなりましたか?
教職員も学生も、全員が「無から有を生む」充実感を常に味わっていました。おかげで今もやっつこみよう!!というチャレンジ精神は旺盛。それで気づけば学長室のイスを温める間もなく、鳥取県の教育委員長や社会福祉協議会委員長など、その他30以上の職を仰せつかって飛びまわる状況に。授業も週4コマ受け持っています。講演も年間100回以上こなします。
- また、設立当初の経済学研究科博士課程に在籍中、国連は性差別撤廃に世界的規模で取り組むために、1975年を「国際婦人年」とすることを決議した。これを機に「女性労働」の研究を始め、それが社会福祉や幼児教育を専門領域とする学者としての今につながっていきます。但し、これらのテーマを示唆してくださったのは大学院の指導教授。深い恩を感じています。
- 博士課程在籍時に荒木俊馬先生の勧めで、米国ジョージ・ワシントン大学に交換研究生として赴いたことも大きかった。学究レベルも生活スタイルも、日米の間に大きな差があった30年ほど前のことです。
- 京都産大の評議員でもある山田学長から後輩や母校へエールをどうぞ
総合大学として1万3000人の学生を抱える京都産大と学生数650人の鳥取短大。すべてが大きく異なるものの、「自己形成の場」であることは同じ。私は常々学生たちに「5Hを身につけよう」と説いており、それは後輩諸君にも伝えたい。
- 5Hとは専門知識を修めたヘッド(Head)、専門技術を備えたハンド(Hand)、感性ゆたかなハート(Heart)、体力みなぎるヘルス(Health)、夢や希望を示すホープ(Hope)。鳥取短大とちがって、後輩諸君には4年という時間がある。よりハイレベルな5Hを培ってくれることを期待します。そのためには教員と大いに語りあってほしい。私同様、人は人によつて育まれるのですから。それも、鳥取短大では私を含む教職員同士の「全学生の顔と名前を覚えよう」と努めています。多くの教職員が「自分のことを知っている」という思いは自己存在への自信を生み、学びモチベーションのベースとなります。
- しかし授業も受け持ち、柔道部と新聞部の顧問も続け、ランチも学食でとっていますが、名前と顔が一致する学生は450人程度。今の京都産大の環境ならその数が半分になってもおかたない。とはいえ、私が「学生と教員の親密な交流を大切にしたい」と思うに至ったのは、創成期の京都産大にそれがあって、皆がそれによつて高まったから。創立40周年を迎える今年、京都産大が見つめるべき初心はこれでしょう。



学食で、研究室で、あらゆるシーンで「学生と教員の濃密な関係づくり」を笑顔で実践されている山田学長。鳥取短大に、創成期の京都産大をみる思いです。